

本論文は、『平家物語』芸能説話研究」と題し、序章、第Ⅰ部から第Ⅲ部、結章、二十三章五節からなる考察である。目次は、以下のとおりである。

序章 『平家物語』芸能説話の研究対象と研究史

一 『平家物語』研究の現在

二 『平家物語』芸能説話研究の現在

第Ⅰ部 『平家物語』芸能説話 ―後白河院とその周辺―

第一章 後白河院周辺の芸能

第二章 寵妃建春門院の「宣旨を反す舞」

第三章 以仁王と笛

第四章 高倉院と芸能

第五章 後高倉院とその周辺

第六章 鬼界島の熊野詣

第七章 「長門本」藤原成経像小考 ―万秋楽の秘曲を手がかりとして―

第Ⅱ部 平家ゆかりの人々の芸能

第一章 平家の人々の芸能活動

第二章 平経盛と笛の秘曲

第三章 平経正

第一節 経正と青山の琵琶説話考

第二節 『平家物語』における青山の琵琶説話

第三節 経正竹生島詣考

第四章 平重衡と千手前

第一節 重衡と千手前 ―酒宴における芸能場面―

第二節 千手前について ―管絃講との関わりから―

第Ⅲ部 『平家物語』に描かれる芸能

第一章 興福寺常楽会

第二章 興福寺常楽会考 ―楽書『體源鈔』を中心に―

第三章 『平家物語』に描かれた名楽器 ―玄上・鈴鹿を中心に―

第四章 万秋楽の秘曲 ―弥勒信仰との関わりから―

第五章 『體源鈔』における万秋楽 ―豊原統秋の法華信仰との関わりから―

結章

一 『平家物語』芸能説話生成の手法

二 『平家物語』芸能説話における虚構の意図と編者像

三 『平家物語』諸本比較から明らかになったテキストの特徴

四 明らかになった歴史的事実

五 仏教と芸能の関係が『平家物語』に与える影響

序章では、研究史を振り返り、研究成果の到達点を確認した。

第Ⅰ部『平家物語』芸能説話―後白河院とその周辺―では、『平家物語』芸能説話のなかで、後白河院に関連する人物の説話を中心に考察した。第一章では、後白河院が催した管絃場面をとりあげた。ここでは、妙音院師長や源資賢などが演奏者として登場し、史実と重なる箇所と、花山院公高のように未詳の人物が登場し、虚構と考えられる箇所があることを明らかにした。既存の説話の型を改変し、『平家物語』のなかに取り込んだと考察した。第二章では、「延慶本」に残される、建春門院と秘曲胡飲酒の舞についての説話を考察した。まず、胡飲酒は、多氏と源氏にのみ伝承される秘曲であることを確認した。また、胡飲酒を伝承していた多氏が殺害され、伝承が断絶してしまう事件が起き、後に堀河院からの委託を受け、源雅実から多忠方に伝授が許され、再び多氏が伝承することとなった歴史を確認した。本説話に、建春門院が登場するのは、権力者が芸能を掌握していた史実と関連があると考察した。第三章では、以仁王と笛にまつわる説話について考察した。「延慶本」では、以仁王が鳥羽院伝来の笛を相承しているとの記述が残る。笛は当時天皇が学ぶべき学問の一つであり、特に堀河天皇、鳥羽天皇は笛を愛していた。「延慶本」編者は、以仁王が鳥羽天皇の直系の皇子であり、王位に継ぐに値する人物であることを、とどころで訴えている。本場面では、以仁王の正当性を訴えるために、その象徴的楽器として笛が選ばれ、名器、蟬折とともに以仁王を登場させたと考察した。第四章では、高倉院と芸能者に関する説話をとりあげた。本説話は「延慶本」「長門本」は『今鏡』の記述と近く、「盛衰記」は『発心集』『続教訓抄』に近い記述であることを確認した。これらのことから、「延慶本」が『今鏡』の説話をもとに物語のなかに取り込み、「盛衰記」が『発心集』『続教訓抄』を参照し、説話をさらに書きかえたと考察した。第五章では、後高倉院の音楽に関する事績を明らかにした。後高倉院は、平知盛夫婦により養育され、平家と壇ノ浦まで行動を共にした。承久の乱の勃発により、子息が後堀河天皇として即位するという数奇な運命をたどった人物である。その後高倉院が、藤原実宗により、琵琶の手ほどきを受けていたことを、「管絃御伝授記」により、明らかにした。また、『文机談』によると、後高倉院は、実宗亡き後、孝道に琵琶を習い、さらに、その娘達を扶持し、孝時に琵琶を伝えている。後高倉院と琵琶西流の人々の交流の様子が確認できた。さらに、後高倉院自身が琵琶の譜を蒐集し、注を施している場面も指摘することができた。後高倉院の持明院殿での琵琶を中心とする音楽活動について明らかにした。第六章では、鹿ヶ谷事件により鬼界島に流罪となった平康頼と藤原成経の熊野詣について考察した。「延慶本」は、康頼に関する芸能説話を載せ、阿弥陀信仰を中心に描き、「長門本」は成経に関する芸能説話を載せ、観音信仰を描き、「屋代本」「覚一本」では、千手観音信仰を色濃く描き、厳島信仰にも触れていることを明らかにした。さらに、院政期における熊野詣の実態や、団体信仰、後白河院の千手観音信仰についても確認した。『平家物語』が編纂された時代は、熊野三所の本地でもある、阿弥陀と薬師、阿弥陀と観音の団体信仰が盛んになってくる時期と重なるが、本説話に団体信仰は見られない。一方、熊野三所はそれぞれの信仰の担い手を持ち、お互いに対立関係にあるなど、複雑な様相を呈していた。安徳天皇入水場面に団体信仰と考えられる記述が残され

ていることから、『平家物語』編者は、同体信仰に関する知識は持っていたが、本説話に関しては、熊野三山に目を向け、説話を構成したと考察した。特に、語り本系テキストには千手観音信仰が色濃く描かれており、後白河院の今様弟子としての康頼の印象が強いことを確認した。さらに厳島信仰や竜神信仰も描かれ、康頼と息子榮尊の水にまつわる伝承と関連がある可能性があると考察した。第七章では、藤原成経が「長門本」で笛の名手とされていることに注目し、その芸能関係の事績について明らかにした。父成親は、当時を代表する音楽の名手師長などとともに、笛を演奏している記録が『玉葉』に残されており、笛の上手であつたと考えられる。さらに、成経の女兄弟である女性は、妙音院師長の室であり、箏をよくしたことが、『秦箏相承系図』により明らかになった。成経自身も後白河院の安元御賀で舞を披露し、それが『建礼門院右京大夫集』に「光源氏」の例も思ひ出でらる」と称されていたことも明らかにした。このように、成経は、父や兄弟など芸能に秀でた者に囲まれている環境であつたことを明らかにした。特に父成親が笛の名手であつたことから、それを「長門本」編者が取り入れた可能性が高いと考察した。

第Ⅱ部「平家ゆかりの人々の芸能」では、平家に関連する人物の説話を中心に考察した。第一章では、武家である平家が貴族化していく過程において、清盛らが芸能を取り入れていく様子を確認した。『伊都岐嶋千僧供養日記』には、清盛が、楽人に依頼し、厳島内侍にその芸を教えさせる様子が記されていることを明らかにした。厳島内侍の芸能の質が高かったことは、『高倉院厳島御幸記』や『梁塵秘抄口伝集』にも残されている。また、「長門本」「盛衰記」には、清盛が楽の名人を集め、代々の宝物楽器を弾かせた説話が残され、『義経記』には、清盛の楽器にまつわる伝承が残されている。これらのことから、清盛が楽器の名器を譲り受け、蒐集していたと人々から認識されていた、あるいはその可能性がある人物として物語編者に捉えられていたと考察した。さらに、重盛の子息維盛は、笛、付歌、舞に優れ、資盛は箏を修得し、『箏相承系図』に師長の弟子として記載され、その様子は武人というより雅な貴公子のように、芸能の素養も身につけていたことを明らかにした。第二章では、「延慶本」に残る、経盛の笛の秘曲説話をとりあげた。経盛が笛の秘曲を伝授されていることや、後白河院による堀河院の報恩講供養、経盛都落ちに際しての弟子への秘曲伝授などは、他の資料の確認はとれず、物語編者によって作り出されたものと推察される。しかし、演奏曲、伝授曲については、秘曲として大切にされていたものであつたことを明らかにした。説話自体に、虚構部分を含みながらも、曲目が秘曲であることによって、臨場感を感じさせることができたと考察した。第三章では、経正の青山の琵琶説話と、竹生島詣について考察した。第一節では、青山の琵琶説話の出典について考察した。本説話は、『十訓抄』『文机談』など類話が多く見られるものである。「延慶本」が『宝物集』を引用する際に、ある部分をそのまま抜き出すのではなく、その前後にある説話も「延慶本」のなかに取り込み、改変していく特徴があることを確認した。それらの特徴を踏まえ、本説話を見ると、『古事談』の本説話前後には、「延慶本」との類似説話が多く配列されているため、本説話の出典は『古事談』である可能性が高いことを明らかにした。第二節では、青山の琵琶説話の諸本を比較し、「延慶本」「長門本」「盛衰記」の配列順が同じであること、「盛衰記」の増補記事が「覚

一本」と同内容のものもあるという特徴を明らかにした。第三節では、経正の竹生島詣について考察した。現在、本説話を確認することができるとは、「覚一本」「屋代本」「盛衰記」「南都本」であり、これらは、室町時代以降に増補され完成されたものである。一方、室町時代以前の竹生島は、歴史記録も少なく、文学作品に登場する機会も少なかったが、室町時代になると、足利将軍家から信仰を得ることとなり、社会的にも竹生島が注目されるようになった。この時期に、『竹生島縁起』の増補改訂や、書写がふたたび行われ始め、また、比叡山でも竹生島への注目が高まり、『溪嵐拾葉集』などの記録に残されていることを確認した。このような時代背景から、物語編者が、竹生島についての記述を物語のなかに取り込もうとし、琵琶や芸能の主人公として経正が選ばれた可能性があることを明らかにした。第四章では、南都焼き討ちという重罪を背負った重衡と、千手前の芸能場面について考察した。第一節では、重衡と千手前の酒宴場面を取り上げた。ここでは、「五常楽」「皇輦」「廻骨」の曲が演奏されたことを確認した。これらの曲目は、『極楽聲歌』『樂邦歌詠』『順次往生講式』にも掲載され、その歌詞も残されている。これらの関係について、当時都で流行した『極楽聲歌』のようなもの(必ずしも文字になっていないものとはかぎらない)を、真源が『順次往生講式』のなかに取り入れて、その後『樂邦歌詠』のような講式練習用の抄出本が出てきたのではないかと考察した。

また、本場面には、重衡の極楽往生を願う、今様や朗詠も配列されており、これらは『順次往生講式』の思想と重なっているといえ、本講式は、説話構成に深く関わっていることを明らかにした。第二節では、重衡と千手前の芸能と管絃講との関係について考察した。第一節でも述べたとおり『平家物語』の重衡と千手前の芸能場面は、重衡の極楽往生を願う歌詞の付いた朗詠・今様そして『順次往生講式』所収歌の琴と琵琶の演奏で彩られ、仏教色豊かな構成である。ここでは、『平家物語』が生成されてくる時代には、管絃を伴う「往生講」が催されていたことを確認し、それらの社会的背景から、本場面は、仏敵となった重衡の極楽往生を願う「管絃講」を描いていることを明らかにした。

第三部『平家物語』に描かれる芸能」では、Ⅰ部Ⅱ部では扱えなかった、楽器や仏教行事、弥勒信仰に関する音楽について取り上げ、考察を加えた。第一章では、興福寺常楽会について考察した。「延慶本」では、治承五(一一八二)年三月に、興福寺で「恒例ノ三会」が行われ、それが、「十四日舍利会、十五日涅槃会、十六日常楽会」であると記述されている。三会といえは、興福寺の維摩会、正月の御斉会、三月の薬師寺最勝会を指すのが一般的であるため、従来この記述は史実と異なるとされていた。そこで、『興福寺年中行事』『諸寺縁起集』『教訓抄』に見られる、常楽会に関する記述を精査し、興福寺常楽会が二月十五日を中心に、複数の日程にわたり開催されていたこと、それらの法会は、常楽会後夜や、法花会、舍利会などと呼ばれ、表記が統一されていないことを明らかにした。「延慶本」の「十四日舍利会、十五日涅槃会、十六日常楽会」の記述は、誤りとは言い切れず、史実に近い部分もあることを明らかにした。第二章では、楽書『體源鈔』に見られる、興福寺常楽会について考察した。興福寺常楽会は、大法会であったが、歴史資料が少なく、その実態は不明な部分も多い。しかし、楽人である豊原統秋によって編纂された『體源鈔』には、仁平三(一一五三)年から応永元(二三九四)年までの、二四一年にわたる常楽会の記録が残されている。『體源鈔』の成立は、長正九(一一五二)年

であるが、一四〇〇年代以降の常楽会の記録が残されておらず、常楽会が一四〇〇年代には衰退していたことを明らかにした。また、常楽会で還城楽、納蘇利、荒序、万秋楽などが演奏されたことや、猿笛という楽器を使用したこと、そして、蛸絵装束を用いるなど具体的様子も明らかにすることができた。第三章では、『平家物語』に描かれた名楽器について考察した。たとえば、「延慶本」は、瑟の名器として「秋風・螺鈿」をあげているが、『愚聞記』や『絲竹口伝』には、箏の名物として、「秋風・大螺鈿・小螺鈿」があげられ、「延慶本」の誤りを確認することができる。「長門本」「盛衰記」は、「延慶本」の誤りを避け、改変した記述になっていることを明らかにした。第四章では、弥勒信仰と関わりの深い万秋楽の秘曲について考察した。まず、日本での弥勒信仰は、飛鳥時代から見られ、中世になると貞慶により、弥勒信仰が確立され、長期間にわたり、続いていたことを確認した。一方、『教訓抄』や『體源鈔』により、万秋楽は弥勒菩薩の都率天で奏でられた曲として、伝承されていることを明らかにした。また、『琵琶秘曲伝受記』や『秘曲伝受月々例』などの記録により、万秋楽は、琵琶や笛の秘曲としても扱われ、秘曲伝授の儀式的対象曲であったことも明らかにした。第五章では、『體源鈔』における豊原統秋の信仰について、付記を中心に考察した。『法華経』普賢菩薩勸発品の、『法華経』受持者が都率天に往生する記述や、『御義口伝』の、弥勒菩薩を法華の行者とする記述から、弥勒菩薩が日蓮宗において大切にされていたことを確認した。さらに、統秋は、『法華経』妙音菩薩品に描かれる、楽道を尊ぶべきである思想を大切にし、日蓮宗信者として、楽人として、心の支えにしていた様子がうかがえることを確認した。『體源鈔』には、豊原統秋の楽人としての意識だけではなく、日蓮宗信者としての信仰の様子がうかがえることを明らかにした。